

## V・ローザノフ、批評家としての出発

——『理解について』から『ドストエフスキーの大審問官伝説』へ——

清水 昭雄

〈はじめに〉

ヴァシーリー・ヴァシーリエヴィチ・ローザノフ（一八五六—一九一九年）が批評家としての地位を確立したのは『ドストエフスキーの大審問官伝説』（一八九一年）「以後『伝説』と呼ぶ」によってである。「カラマーゾフの兄弟」の中の「大審問官伝説」の持つ深い宗教的、哲学的意義を初めて明らかにし、以後のドストエフスキー研究のひとつの方向を決定した評論であった（最初は雑誌「ロシア通報」に発表され、一八九四年に本として出版された）。しかし、ローザノフにはこの評論以前に『理解について』（一八八六年）という処女作が存在する。

それは彼の生涯にわたる著作活動の全貌を知る者にとつては奇妙な書である。ローザノフの数多くの著作の中で、最大のものであり（初版の本文だけで七三七ページ）、また体系的著述によつて哲学と学（科学）を総合し、宇宙と人間世界の全てを説明しようとする極めて野心的な著作であった。晩年のローザノフが作家として『孤独』や『落葉』で達成した表現——断片的で非体系的なアフゾリズム、一見したところ矛盾に満ちた内容、理性的でありジツドな思考ではなく、自由な心の動きに伴った連想や気分、今日の言葉でいえば潜在意識の領域での心の活動を重視した表現——を思う時、ローザノフが『理解について』からかけ離れた所に到達したことが分かる。

では「理解について」は作家が哲学的な野心を持っていた時代の未熟な若書きにすぎないのか。そこには後年の矛盾に満ちた作家ローザノフの理解に役立つものは存在しないのか。本稿が第一に課題とするのはこの点の検討である。「理解について」はかつて研究されたことがほとんどない、いわば忘れられた著作である。しかし、その検討は後年のローザノフが複雑な作家であっただけに、その思想の起源を知る上で重要だと思えるのである。

本稿の第二の課題は「伝説」をローザノフの思想の発展過程においてとらえ、「理解について」との関係を明らかにすることである。これによって、批評家ローザノフがどのように誕生したかが理解できるだろう。

### 一、「理解について」、「伝説」が書かれるまで

「伝説」が出版されるまでのローザノフの生涯を簡単に辿っておこう。「ローザノフの伝記はかなり平凡である」とニコリューキンは指摘しているが、かならずしもそうとは言えない。

ヴァシーリー・ヴァシーリエヴィチ・ローザノフは一八五六年五月二日コストロマ県ヴェトルクに生まれた。父は正教の司祭の息子であり、営林署に勤める役人であった。この点でローザノフには聖職者の血が流れている。

父が一八六一年に亡くなると、母とローザノフを含む六人の子供は長男のニコライがギムナジウムで学んでいたコストロマに移った。母は全財産を処分して得た金でそこに小さな家を買ひ、以後、一家はわずかな年金で生活した。(ちなみに母は没落した貴族のシーシキン家の出であった)。しかし、長女が結核で死に、母が重病で寝込むと一家はひどい貧困に落ちた。ローザノフの貧困とのつきあいはここから始まる。それは少年期、青年期を通じて彼につきまとい、晩年に違う理由からではあるが彼を飢え死に近い形で死なせることになった。もつとも彼の人格形成上での影響という点では、物資的貧困よりもそれがもたらす家庭内の重苦しい雰囲気の方が重大であった。

安らぎのない家庭、物質的な苦勞、興味のないギムナ

ジウムでの勉強（入学は一八六九年）、これらの外的な事情がローザノフを内向的な、空想に楽しみを求める少年にした。

一八七〇年、死の床にあった母親の依頼で兄ニコライがヴァーシリーを引き取り、教師として赴任したシムビルスクに連れて行く。二年後ヴァーシリーはニコライとともにニジニ・ノヴゴロドへ移った。そこでギムナジウムの四年生から八年生の時期を過ごすことになった。ヴァーシリーが哲学や評論を通して観念的世界に触れたのはシムビルスクのことであった。下宿の女主人の息子で「六十年代」の思想に入れ込んでいたアレクセイ・ニコラーエフが彼に読書の手ほどきをした。以後、ヴァーシリーはギムナジウムでの退屈な勉強とは別に自分自身の内的世界を読書によって構築していくことになる。彼が読んだのは、当時はやりの生理学の本、西欧の広い意味での社会哲学系の本（J・S・ミル、J・ベンサム、マキャベリー、T・B・マコーレー、F・ラッザールなどの著作）、ロシア人ではベリンスキー、ドブローリユーポフ、

ピーサレフの著作などであった。ヴァーシリーは最初に彼らに熱中するが、結局その熱中は長続きしなかった。彼に決定的な影響を与えたのはドストエフスキーであった。ギムナジウム六年の時からドストエフスキーはローザノフの最も愛する作家となった。「ドストエフスキーを私は血のつながった者、身内の者として読んだ」、「私はかつて一度としてひとつたりとも彼の中に理解のできないものを見いだしたことがない」<sup>(2)</sup>。

ここで「理解について」、「伝説」との関係で注目すべき事実をひとつ挙げておきたい。ヴァーシリーが一八九一年に書いた短い「自伝」での記述である。それによれば彼はギムナジウムの四年生の時、ミルの『功利主義論』（一八六三年）から「人生の目的は幸福にあること」を知った。以後彼は折りに触れこの命題を考え続け、また自分の生活をそのように整えようとした。しかし、努力をすればするほど苦悩は増すばかりであった。だが大学三年の時ある答を得る。「ある時いつものように座ってそのこと（幸福——引用者）について考え続けていた時、

突然ある理解に達した。人間生活の最高原理としての幸福という観念はたしかに否定しがたい、しかし、それは人間によって創られ、考えだされた観念であつて、人間によって発見された観念ではない。それは人間が歴史において自らに立てた諸目的の最終的な一般的結論でしかなく、自然によって人間の内に置かれた目的ではない。これ以後ローザノフはありのままの人間を理解しようと努力するようになったという（『理解について』はその志向の延長上で書かれた）。またこのギムナジウム時代からローザノフは将来は作家か思想家になりたいと漠然と思つていたようだ。

一八七八年にローザノフはモスクワ大学の歴史・文学部に入學する。大学での勉強には相変わらず興味が持たず、教室では「寝て過ごした」というが、学業は一応こなしホミヤコフ奨学金をもらった。大学時代にはローザノフにとって特筆すべき出来事が三つある。初めの二つは、歴史（初めは中世史）への関心の目覚めと二年生から三年生に上がる時期に初めて読んだ聖書である。ギ

ムナジウム時代には宗教の授業はあつても聖書そのものは読まなかつたのだ。この聖書を通してローザノフは宗教の世界に入っていく。

三つ目は大学三年（一八八一年）の時の結婚である。相手は二十歳も年上のアポリナリヤ・プロコフィエヴナ・スースロヴァ。「ドストエフスキーが最も強く情熱を注いだ対象」（グロスマン）と言われるドストエフスキーの愛人であつた。病身の妻を捨てるのは忍びないとドストエフスキーが結婚をためらうのに業を煮やし、スースロヴァはローザノフを選んだらしい。スースロヴァはその年でもまだ美貌を保つていたが、エキセントリックな性格で、彼女との結婚生活は幸福とは言えないものだった。一八八六年にはローザノフは彼女に捨てられた。しかし、後に彼が新しい恋人との結婚を望むと、彼女は離婚に応じず、ローザノフは秘密結婚を余儀なくされた（一八九一年）。これが彼の生活、思想にも大きな転換をもたらすのである（教会との対立を通してキリスト批判にいたる）。

ローザノフが大学を卒業したのは一八八二年であった。さきに述べたように彼は作家あるいは思想家になりたかつたのだが、当面はそれもかなわず、選んだのが教職であった。ローザノフは結局十二年間教員を務めることになり、三つの学校に奉職することになった。オルロフ県のプリヤンスク四年制ギムナジウム（一八八二—一八八六年）、エレッツ・ギムナジウム（一八八六—一九一年）、スモレンスク県ペーロエ四年制ギムナジウム（一八九一—一九三）である。ちなみに後の宗教哲学者セルゲイ・ブルガーコフと作家ミハイル・プリシヴィンはエレッツ時代の教え子である。ローザノフは生徒は好きだったが、形式張って、知的に閉塞したギムナジウムの雰囲気になじめず、教職を天職とは思えなかった。精神生活の中心を占めたのは著作や翻訳の仕事であった。『理解について』、『伝説』はこのような生活の中で書かれたのである。

## 二、『理解について』

『理解について』はプリヤンスクの教員時代に五年か

けて書かれた。スースロヴァにはいつも「馬鹿げた本」を書いていと嘲笑されたという<sup>5</sup>。六百部が自費出版された。『理解について』は従来研究者によってほとんど研究されることがなかった。最も長い言及のあるファテーエフの研究書でも、以下に述べられる程度である。

「ひどく抽象的なテーマ、つまり全一的な知識としての理解を基盤に学問的方法論と分類を扱おうとしたもので、無味乾燥で学術的な言葉によって書かれ、読者に特別な素養とかなりの知的努力を要求する著作である」。

あるいは、

「『理解について』の文体には『ローザノフ的なもの』はまだない。読むのは大変である。全般的にはローザノフに好意的であったグリツォフの見解が注目に値する。『すべてが非常にブッキシユでスコラ的で生気がない。この退屈このうえない本はいかにしても読み通せない』」

ファテーエフはグリフツォフの見解をおおげさなもの

と退け、自分の評価を次のよう述べている。

「理解について」の中には、外面的なヘーゲル主義の背後に、当時の哲学で支配的であった実証主義の機械論的な見方に反対して自然を有機的統一と把握するローザノフ独自の見方を見いだすことができる<sup>6)</sup>。

実際にこれらの見解はどこまで正しいのか。

## 二・一、「理解について」の内容

（「理解について」の本文は、B. B. Розанов, *О понимании, Санкт-Петербург, 1994*を使用した。また引用の際は引用文の末尾にページを示した）。

「理解について」の「理解」とは当時の実証的学問と哲学のそれぞれの欠陥を補うためにローザノフが提出した概念である。前者は蓋然性を排し、実証性、確実性に固執するあまり、人間の生にとって重要な世界観や人生観について語ることがない。それは断片的な知識の集積に留まっている。哲学はそれらの問題について思弁する

が確実性を欠く。両者を総合する知は存在しないのか。

これがローザノフの問題意識であった。トルストイは有名な「懺悔」以降八十年代に、実証性を重んじるあまり価値の問題をできるだけ排除しようとする西欧産の学問を批判したが<sup>7)</sup>、ローザノフもこの関心を共有していた。先にローザノフが幸福の問題で悩んだことを指摘したが、彼はそこから人生と世界の「理解」にむけて出発したと言えるのである。

ローザノフの「理解」に関する見解は次の通りである。真の学問の対象とは時間の経過の内に変化しないものだ。知識はこの不変なるものについての偶然的で断片的な知見で、絶えず増加し、また機械的に結合できる。しかし、これはまだ学問ではない。「理解」とはこれらの断片的な知識を総合的に説明しうる関連を見いだすことである。知識の獲得を行うのが「知性」であり、「理解」を可能にするのが「理性」である。

「理解について」では「理解」を含む認識論を扱った部分が初めにくる。そこでは、理性による世界理解が可

能なのは、理性の中に経験に先立つ「図式」が存在するためと説明される。その「図式」とは本質、属性、原因、目的、類似と相違、数の六つである。世界（宇宙）はこの「図式」を通して理解される。また同時に、それらは世界（宇宙）の構成要素となる。それは、存在と変化<sup>(8)</sup>、本質、属性、原因と目的、類似と相違、数と量である。理性の「図式」が同時に世界の構成要素であるのは、「図式」に当てはまらないものは理解できず、存在するものは理解されるものとしてしか存在しないからとされる。理性と世界はこのように関係している。「理性の中には何か宇宙的なものが、宇宙には何か理性的なもの」(p.51)が存在する。ローザノフは次に世界の構成要素を検討する。この部分はローザノフ哲学（ローザノフ自身は従来の哲学を越える学を提唱しようとしたのだが、広い意味ではそれも哲学なのでこう呼ぶ）の「存在論」に当たる部分と言えよう。

ローザノフは「存在論」の検討の後、宇宙の中の独自の世界、人間世界の考察を行う。人間世界は人間が精神

を持つことによつて宇宙に成立する。この精神の三機能が理性、感情、意志であり、それらの創造行為によつて生ずる学問、芸術、宗教、国家、法、歴史等が考察され、また善悪の問題が論じられる。

以上がごく簡単な「理解について」の構成の説明である。実証的学問と哲学の総合という大きな抱負にもかかわらず、「理解について」を学問的な書としてみた時、大きな欠陥があることを指摘しなければならぬ。「理解について」の体系的記述の中心となる理性の「図式」が如何に導き出されたかが曖昧なことが最大の問題である。「図式」は明らかにカントのカテゴリー（純粹悟性概念）の影響によるものである。カントはこのカテゴリーを判断の悟性形式から導き出した。しかしローザノフは「図式」が何に由来しているか説明していないのである。この点で「理解について」はすでに学問的な著作としての資格を欠いている。

理性の「図式」の概念が同時に世界の構成要素になる点にヘーゲル哲学の影響を見ることは可能だが、「理解

について」では弁証法的な概念の發展は存在しない。ヘーゲル哲学の本質的影響は見られなと言えらるだろう。

結局、「理解について」はドイツ観念論哲学の外皮を被っているがその内実はローザノフ独自の哲学である。ではそれは如何なる哲学なのか。

## 二・二、ローザノフの独自の哲学としての『理解について』

「理解について」がスコラ的で無味乾燥、読みにくい著書であるという評については触れた。それは事実ではあるが、この本は、ローザノフを知る者には、半ばを少し過ぎた第二書第八章「人間世界についての教説」からにわかに興味あるものになる。先の「存在論的」部分がローザノフなりの勉強ぶりと一種の詮索癖ともいえる思弁性を示しながらも、あまりに学問的体裁を整えようする傾向が強いのにたいして、「人間世界の教説」ではローザノフ自身の見解がはっきり書かれているからである。それを幾つかの特徴を挙げながら説明しよう。

### (一) 独自の観念論、「精神」

ローザノフ哲学はまず観念論である。初めにローザノフは精神が自己の存在の原因を物質に持つものではないことを証明しようとする。その証明は哲学的に優れているわけではない。精神と物質が互いに直接的には作用を及ぼしえないことがその主要な理由とされる。この点でデカルトの域を出ていない。また脳は精神現象の発生源ではなく、制約的原因とされる。脳は生理器官であるが、器官とはある定まった機能を繰り返すことを目的としており、新しい現象(精神的創造)を可能とする精神がその産物であるはずがないというのがもうひとつの理由である。ちなみに、生理器官の脳から自殺という観念は生まれてないとも指摘されている。

ローザノフは「理解について」では精神の由来については述べていない。しかし実は、それが神の創造によるものであることが第二書第五章で暗示されている。そこでローザノフは宇宙を「人間によって創られたのではない世界」、「神の世界」(p.106)と呼んでいるのである



(もつとも、この一言だけである)。また精神が所有するのは物質性を持たないフォルマ(フォルマ論については後に述べる)であり、それ故、精神には不死の可能性があると主張されている。人間世界はこの精神の行う創造行為を中心に説明されるのである。

(二) 精神による創造行為

精神の創造行為を問題にする前に精神の三つの機能、理性、感情、意志にたいするローザノフの評価について一言しておく。『理解について』はすでに述べたように理性の「図式」による世界理解と後に触れる「理解」に向かう理性の止むことのない欲求を中心にして書かれている。従って理性が精神の中心であり、その点で理性は高く評価されている。先の「自伝」の中で『理解について』の主題をローザノフは次のように規定している。「そこ(「理解について」——引用者)では、人間の本性が持つ自然的目的の中でおそらく最も重要なもの、つまり知的活動が研究された」<sup>10)</sup>。しかし、人間世界を形成する精神の作用として理性と並んで高く評価されているのが感情

である。感情にたいする高い評価がローザノフ哲学のひとつの特徴である。<sup>11)</sup>この点にスラヴ主義的な精神の全一性理論の影響を見ることが可能かも知れないが、それははっきりしない。

以下三機能のそれぞれの創造について『理解について』の全体に述べられていることを再構成して説明する。

(a) 理性における創造行為

ローザノフによれば、理性は、世界理解の可能性の基盤を「図式」に持ち創造行為を行う。そこでは二つの力が重視されている。ひとつは「理解」へと向かう理性に秘められた不思議なポテンシャルである。それは「自己規定」、「自己深化」(P.38)の力であり、ひとたび開始されれば、外部の影響にかかわらず「理解」が終了するまでその過程を貫徹しようとする。明らかにこの不思議な、神秘的と言いうる力にローザノフは人間精神の特徴を見ている。

ローザノフによれば、理性の第二の力は理性の「図式」を使用して、外部の物の世界の対象、あるいはその関連

に相即するフォルマを捕らえ、それを言葉で表現し、伝えることである。「知識」では外部の個々の物のフォルマや経験によつて得られるそれらの単純な関連のフォルマを知る。しかし「理解」においては「知識」より高次の関連のフォルマが把握される。そして重要なことは高次の関連のフォルマ、これを真理のフォルマと呼ぶなら、それは「精神」の内側から来るのである。なぜそれが「精神」の深部からもたらされるかについては後に検討する。

(b) 感情における創造行為

感情における創造の問題は重要である。後年のローザノフを問題にする時に必ず考慮しなければならない美の感情、道徳感情、宗教感情の問題が扱われているからである。これらは感情において創造される。そこで注目すべきはそれらがともに、ローザノフにおいては、理性における真理のフォルマと同様に、始源的なものにその源を持つことである。

ローザノフにとって美とは感情の始源にある。芸術創

造とは感情の始源から発するフォルマ（つまり美のフォルマ）を精神の外部の物質世界に実現することである。

「個々の具体的な芸術的形象のうちには人はすべての人に共通である永遠不変な精神のあり方を表現する」(p.342)。

「芸術は、精神に属する美のフォルマとそのフォルマと関係を持たない外部世界の対象を内的に結合し、美しいものを創造する使命だけを持つ」(p.387)。したがって美のフォルマが感情に生成するかどうか人が芸術家にするかどうかを決定する。それはその本人の自由になるものではない。ローザノフは芸術創造の「ままにならなさ」を強調している。しかし美のフォルマは一体どこから生ずるのか。この点について彼には興味深い記述がある。「美とは人がそれから隔たってしまったもの、『現在』の背後にあるものであり、合目的に造られたものとしての人間の本质が『現在』の先に希求するものである」(p.395)。これは先の精神の不死性の可能性や真理のフォルマと合わせれば、プラトンのイデア説を思わせる。しかしこの問題については後に考察しよう。

(c) 道德感情の創造の問題で重要なのは次の二点である。第一に、美の感情と同様に道德感情も精神(感情)の始源から発し、いわば始源のフォルマを持つことである。それ故、自立的である。第二は、道德感情が美の感情や「理解」以上の喜びを人間にもたらすという主張である。ローザノフによれば、美や思想(「理解」の結果としての)は他の何ものにもまさる喜びを人間にもたらす。しかし「その喜びには何か苦いものがある。美と思想の喜びは魂に冷たい灰を残す。喜びの炎が強く燃えれば燃えるほど、多く残る」(P.349)。しかし道德感情にはこのようなことはない。道德感情がなぜ「理解」や美の感情より高く評価されるのか。それは宗教感情の考察で明らかにされる。しかし、いずれにせよ道德感情の高い評価は後年のローザノフ自身が「アモラリズム」を標榜したことを考えるなら重要である。しかし、ここではその問題には触れない。

(d) 道德感情以上に高く評価されるのが宗教感情である。宗教感情の本質とは、ローザノフによれば、「す

べての個人的なもの、すべての時間的、地上的なものから解き放たれること」であり、「すべてを飲み込んでしまふ世界感情によって自己の桎梏から解放されることである」(P.378)。この忘我の状態がまずローザノフの宗教感情規定の特徴である。<sup>12)</sup>この忘我状態は同時に精神の全一性を実現されている状態であり、真の人間が存在している状態でもある。「深い叡知」、「純粋な道德性」、「高次の美」(p.350)が実現しており、「全一性と統一性に満ちており、ここにその秘密、特性、力が存する」(p.350)。ではこの状態はいかにしてもたらされるのか。ローザノフによればそれは実は「始源の純粋さ」であり、すべての人の心に存在する。「人がただ人であり、歴史や文明やすべての取り巻く環境が人に強いているあり方を、意識せずに、自然に止めるなら」(p.351)その状態になれるのである。聖書や他の発達した宗教はすべて人間の始源の無垢な状態の存在について述べているとローザノフは言う。しかしその状態を人間は忘れてしまう。

内的な純粋性、完全性から離れれば離れるほど、人は他

の目的に向かうようになる。本来的な状態から逸脱している姿と向き合わないように、いよいよ活動に励む。その結果、物質的に満たされれば満たされるほど人は苦しくなるのだ、とローザノフは指摘している。これはパスカル<sup>13</sup>やキルケゴールを思わせる見解である。ローザノフは結論する。「宗教の中に生きることによってのみ、人は真の自由でありえる」、「宗教以外の全ての目的に達しても、人は全体を欠いた部分に達するだけである」(p.404)。

このようにローザノフの見解では、宗教感情において人は人間世界を超越する。そこには自我はない。しかし、そこでは始源に触れることができる。ローザノフにおける道徳感情の位置は、宗教感情において見いだされたこの始源の純粹性を自我において確定することにある、と思われる。いずれにせよ、この時期のローザノフの見解では道徳は宗教と結びついていたことを指摘しておく。人間を「始源の純粹性」から引き離すものは何か。この問題にたいしてローザノフは「他の強力な意志が創造

者から人を逆らいがたく引き離した。この意志にたいして、それを克服するために同じ力を持つ意志がいつの日か立ち上がるかどうかわれわれは判断できないし、予見できない」(p.402)とだけしか述べていない。

(e) 意志は精神活動の多くの面で発現するが、ローザノフによって重要な役割が振られているのが政治分野である。政治、さらに国家に関するローザノフの見解は、政治も国家も人間の福祉のためにあるということである。たとえば国家は次のように定義されている。「国家は心理的な諸関係の合目的で独自の集合であり、その活動の使命と帰結はある種の福祉である」(p.465)。ローザノフは政治や国家について様々な分析を行っている(例えば、第二書第十八章はほとんどが国家についての分析である)が、その基本的な発想は意志(の創造)が理性と感情の創造を支えるという点にある。意志は理性や感情の創造に直接的関係を持たない。偉大な政治や国家は優れた思想や芸術と結びつかない。しかし意志はそれらを支えうるのである。

ローザノフの哲学はこのように精神とその創造活動の上に形成されている。しかしローザノフ哲学を規定するにはもうひとつの重要な特色について触れておかねばならない。それはフォルマの哲学であるということである。

### (三) フォルマの哲学

すでに検討したように理性と感情の創造活動ではフォルマを得ることが重要であった。理性ではそれが「理解」につながり、感情ではそれが美、道徳の創造につながった。ローザノフでは明らかにフォルマが実在する。「フォルマは物質性を持たずに存在しうる」(p.134)。またフォルマは「不動性」、「不変性」を持つ。ローザノフの「存在論」では個々の物は「質料・形相論」的に構成されている、と思われる。しかし、その際「形相」は一義的に決定されない。「本質」としてのフォルマ、「属性」としてのフォルマが存在する。特に「属性」は他の諸物、諸事実との関係であらわれてくるフォルマでその複雑な関係が世界(宇宙)の複雑性を造り上げている。また「永遠のポテンシャル」としてのフォルマも存在する。おそ

らくローザノフの見解ではフォルマは階層的であり、彼の宇宙のイメージを想像してみるならば、無数の階層をなすフォルマが複雑に結びつき変化する世界であろう。この世界(宇宙)で芸術活動や「理解」がなされるのである。

芸術活動ではまず美のフォルマが芸術家の感情に生じてくる、彼はそのフォルマを物として具体化する。幾何学の定理もフォルマとして実在する。理性はそれを捕らえる、それが理性の創造行為である。ローザノフは理性が捕らえる前に幾何学の定理はどこにあつたのかと問っている。芸術家や思想家とは美のフォルマや真理のフォルマが精神のうちに生じてくる人物であつた。

これらのフォルマはどこから来るのか。通常のフォルマをわれわれは外部世界に見ている。しかし創造における美や真理のフォルマはわれわれの内部、つまり精神に生ずる。また外界の影響なしに生ずるということが重要である。ローザノフはここに眞の学者、芸術家を他の人々と区別するクライテリアを見ている。なぜフォルマが精

神に生ずることが可能なのか。すでにわれわれはローザノフ哲学の中に二つの学問的体系としての不備を見いだした。理性の「図式」がどこからくるのか、またそもそも物質とは異なる（別の実体としての）精神がどこからくるのか、ということであった。「理解について」では「神の世界」という一言によつて、精神の由来が神に帰されていることが推測できただけであった。つまり、精神そのものが謎である。

結局、われわれはローザノフ哲学におけるフォルマの源を精神の源と同様に神秘の闇に求める他はないように思える。ローザノフ哲学の源泉は神秘主義である。しかし、これを先に示したプラトンのないデア論と考えるのは正しくないだろう。なぜなら学問を標榜する「理解について」ではイデア界に類するものについては全く語られていないからだ。

フォルマが精神の深い闇から生ずると考える時、先に検討した宗教感情の創造という一見奇妙な創造がよく理解できる。そこではフォルマとしての自我が消滅する

（忘我）。精神は人間的フォルマを失う。「理解について」では精神が人間世界を宇宙から区別する存在であった。したがって精神において人間的フォルマが消滅した時、そこは宇宙である。美や真理のフォルマはおそらくそこから生ずるのである。

したがって、ローザノフが「理解について」の終わりに近づいた所で学問と宗教感情の強い結びつきを語っているのも当然のことである。ローザノフによれば、人間が真に求めているものは名誉でも富でも権力でもない。求めているのは「理解」である。人間の不思議な精神とその背後にある宇宙についての「理解」である。したがってローザノフによれば学問（「理解」を真の学問と考えらるなら）とは現実の生活を知ることではない。「理解は生活とは結びつかない。理解は生活の世界と並んで発展している特別な世界を形成している。理解は生活の世界を了解し、しばしばそれを導く、しかし、それ自体は決して生活の世界によって導かれもしないし、それに仕えることもない」(p.514)。芸術についてもおそらくロー

ザノフは同じことを考えていたのである。

## 二・三、ローザノフの思想における『理解について』の意味

『理解について』はドイツ観念論的な外見を取り去れば、神秘主義的な源泉を持つ物質性を持たない精神が極めて重要視される独自の観念論である。もし本質的な影響を考えるならプラトンのイデア論、あるいはアリストテレスの質料・形相論や人間の生活の意味を「観想」に見る見解の方にあると思われる。

『理解について』には後年のローザノフを考える上で重要と思われる諸点がいくつが存在する。それらの厳密な考察は以後のローザノフの思想の検討の後に行われるべきものなので、ここでは「理解について」の何に注目しておくべきかという観点から簡単に三つの点を指摘しておく。(一)ローザノフの宗教観が重要である。ローザノフは宗教の意義を人間精神の深部で宇宙が開示する点に求めている。またそこは「理解」(「深い叡知」、美、

道徳の源泉でもあった。この宗教観、また宗教、道徳、美(芸術)、学問の関係がローザノフにおいて以後どの様に考えられるかに注目する必要がある。(二)彼のフォルマの見解はどの様に変化し、それは彼の独自の文体の生成といかなる関係を持つか、また本論ではほとんど触れられなかったが『理解について』の「存在論」に「目的」という概念が存在すること、またそこでのポテンシャルとフォルマの変化の問題も重要である。(三)『理解について』で頻出する「精神」が後年の彼のアフオリズムで重要な意味を持つ「魂」といかなる関係を持つかに注目する必要がある。この最後の点に関しては「理解について」から「伝説」への移行の問題でも論じられる。

次に「理解について」についての検討から「伝説」の検討に移ろう。

### 三、「ドストエフスキーの大審問官伝説」

(以後ローザノフの作品「ドストエフスキーの大審問官伝説」は「伝説」、「カラマゾフの兄弟」の第五篇第五章は「大審問官」、イヴァンが語った物語は「大審問官伝説」と呼ぶ。また引用はB.B. Позанов, *Несовместимые контакты жизни*, Москва, 1990から行い、引用文の末尾にページを示した)。

「伝説」は「カラマゾフの兄弟」が世に出てからは十年後に書かれたもので、すでに述べたように後のドストエフスキー研究のひとつの方向を決定した画期的な著作であった。しかし、本論の第三、四章で問題にするのは、「伝説」全体の考察やドストエフスキー研究史上で「伝説」が持つ意義の評価ではなく、ローザノフの思想の発展過程における「伝説」の位置を確定することである。しかし、その考察のために「伝説」の内容を、(一)ドストエフスキーの創作の中心テーマに関するローザノフの見解、(二)「叛逆」(「カラマゾフの兄弟」の

第五篇第四章、「伝説」では「大審問官」とならんで問題にされる)と「大審問官」の意義に関するローザノフの見解、の二点についてある程度詳しく検討しておきたい。

(一)ローザノフはドストエフスキーの創作の中心テーマを何であると考えたか。

ローザノフはドストエフスキーを論ずる前にゴゴリを問題にする。ゴゴリは、ローザノフによれば、魂を持たない人間しか描けなかった。それはゴゴリが「あまりにも自分の魂にひきこもっていたため、自分の魂で誰か他人の魂に触れることができなかった」(p.51)からである。人間の魂に触れることのできなかったゴゴリのまさに対極に位置するのがドストエフスキーであった。

ローザノフはまずドストエフスキーが描くことのできた人間の魂の幅の広さに驚嘆する。ドストエフスキーは、一方では、最も厭わしい人物の中に、最も考えられないような状況できわめて美しい魂が顕現するのを描くこと



ができた。このような描写を読んだ後では、人間に対する軽蔑は不可能になるとローザノフは指摘している。またドストエフスキーは子供の心や他人のために自分を犠牲にできる優しい心を描いた。この点でドストエフスキーは非常にヒューマンな作家である。しかし、他方、ドストエフスキーは「地下室」の住人の不機嫌で意地悪でエゴイステイックな心を描くこともできた。このような相反する魂を見事に描くことのできたドストエフスキーとはいかなる作家か。これがまずローザノフの視点である。そしてこの視点から浮かび上がってくるのは、もともと人間の魂とは分裂し、不調和なものであるが、ドストエフスキーほどこの分裂、不調和の魅力を知っていた作家はいないという見解である。

「どれほど美の世界が魅力的であろうが、それよりもなお魅力的なものがある——それは人間の魂の墮落である、生の数少ない和声を消してしまう生の奇妙な不調和である」(p.61)。

ドストエフスキーを魂にたいする異様なほどの洞察力

の故に、魂の不調和という不可思議に魅いられた作家と捕らえた点がローザノフの独創的な観点であった。

ドストエフスキーのこの魂の不可思議への関心は「地下生活者の手記」、「罪と罰」、「カラマーゾフの兄弟」の「叛逆」、「大審問官」へと深化していくというのがローザノフの見方である。

「地下生活者の手記」では魂を中核に持つ人格の絶対的な自由が問題にされる。しかしここにいたる過程でローザノフが注目するのは「冬に記す夏の印象」に書かれたドストエフスキーのロンドン体験であった。ローザノフの見方は次のようなものだ。ドストエフスキーは初めて訪れたロンドンで文明がひとつの達成を遂げているのを感じた。しかし、同時に彼はそれが実現された理想だとはどうしても思えなかった。文明の達成にたいする違和感をドストエフスキーに感じさせたものこそが彼の魂にたいする見解であった。文明は不可思議な魂の全体に満足を与えるものではなく、その一部にしか満足を与えない。文明の発展はかえって全体としての人間の魂を害す

るのではないか。文明の目的とは人間ではないのかも知れない。このような疑惑が彼に生じたと言う。

「人間は歴史の過程で進歩していく。従って、人間は目的である。しかし、それはただ理念としてで、幻想のことだ。現実には人間は手段で、目的は諸々の制度そのものであり、社会的諸関係の複雑化、学問と芸術の開花、産業と貿易の強大化である」(p.67)。

ローザノフによれば、『地下生活者の手記』は「冬に記す夏の印象」の文明観の延長で書かれた。そこでは文明のシンボル「水晶宮」の理念にたいしてドストエフスキーが理解した不可思議な魂を中核として持つ人格が徹底的に擁護されている。その理由をローザノフはこう述べている。

「人間にとって新奇なものの感覚、すべての思いがけないもの、気まぐれに変化するもの——現在、人生の歩みがそれらに従い、多くの苦しみとそれらにみあった喜びを人間が味わっているそれらのもの——がなくなれば、人間にとって全ての幸福は消滅す

るのではないか。全ての者に同じものを、というのは人間の本質の根源的原理、すなわち、個性に反するのではないか。また未来と「理想」の不動性は人間の自由な意志、時として外部(の圧力——引用者)に抗し、理性的な規定にさえ反してあれやこれやらを自分勝手に選びだしたいという渇きに反するのではないか。自由と人格(個性——引用者)なしに人間は幸せなのか」(p.70)。

ここには後にローザノフにとって重要になる「レオンチェフの問題」<sup>[4]</sup>が明確に言いあらわされている。さらにローザノフはドストエフスキーの人格(個性)擁護の根底となる魂にたいする見解を「人間とは自己の本質の全体性において非合理的な存在である」(p.70, p.71)という命題、および「非合理的な存在」とは神の創造につながる「神秘的なもの」だという命題(「まさに創造という行為において疑いなく彼に与えられた何か神秘的なものの存在」(p.73)に集約した。またドストエフスキーが好んで、自殺、犯罪、狂気、病氣(てんかん)を描い

たのもこの非合理性への嗜好のためである、とされている。

「罪と罰」は、ローザノフによれば、「宗教的」観点によつてしか明らかにされえない魂の「神秘的」起源を明らかにした作品である。それも、否定されることによつてその存在が明らかにされるという形で書かれた作品である。つまり、理性的判断によつて理性を越えた「神秘的」存在である魂を破壊してしまつた時、何が起こるか問題にされていると言つのである。「ラスコーリニコフの魂の中で起こっていることは理性を超えたことなので、彼は最後まで女金貸しを殺してはいけない理由が分からなかつた」(P.75)。ただ彼は「自分が殺したのは老婆ではなく、自分自身だ」(P.75)と感じた。「われわれが仮に「魂」と名づけている存在の神秘的な結び目はまさに感じ取れないつながりによつて他の神秘的な結び目と結びついている。彼はその外的な形態を破壊した」(P.76)。これがローザノフの解釈である。

(二) ローザノフは「反逆」、「大審問官」をどのよう

に評価したか。

ローザノフによれば、ドストエフスキの魂の探究はさらに続き、「カラマーゾフの兄弟」の第五編 Pro et Contra の第四章「反逆」、第五章「大審問官」で極点に達する。「地下生活者の手記」や「罪と罰」で主張された魂を中核にもつ人格の絶対性という観念は最大の試練を受けることになる。それは現世における苦悩を媒介に問われた。すでに見たように、ローザノフによれば、ドストエフスキは魂の内に「神秘的なもの」、つまり神の創造の成果を感じ取っていた。しかし一方では、魂の洞察者ドストエフスキは人間精神の蒙る苦悩の大きさを十分に知っていた。そこで問題が現れる。何故に創造を通して神とつながる魂が地上でかくも苦しまなければならないのか、という疑問である。ローザノフは「反逆」と「大審問官」の章こそがこのドストエフスキの問題意識の最高に発揮された部分であり、人類にとって最大の問題を扱うものと考えたのである。

周知のように「反逆」は「カラマーゾフの兄弟」の主

人公の一人イヴァンが地上における人間の苦悩、とりわけ子供の苦痛にたいする神の沈黙を激しく糾弾する部分である。また「大審問官伝説」はイヴァンの創作とされる物語であり、その登場人物大審問官は人間の苦悩の主たる原因はキリストが荒れ野において悪魔の誘惑を拒絶し、それによって人間に自己の生における選択という自由の重荷を負わせたことに求めた。さらに彼は多くの人間は自由とそれとでの選択の重荷には耐えられない存在であり、パン（物質的幸福）と奇跡、神秘、教権によって支配された方が幸福であると考え、少数の自由の重荷に耐え善悪の判断をする支配者と自由を忘却しそれゆえに幸福な多くの被支配者の社会を実現しようとした。

「反逆」と「大審問官」をローザノフはどのように評価したのか。

「反逆」をローザノフは「旧約的」部分と呼ぶ。そこではイヴァンは神の存在については論じないと言う。しかし地上の出来事については語る権利があると主張し、子供の苦悩、苦痛の例を挙げ、この事態を許している神

を認めないと断言する。ローザノフはこのイヴァンの言葉を「人間がその歴史において絞り出した最も痛ましい言葉。神を否定するのではなく、彼は自分の顔を神からそらすのだ」（p.110）と評した。しかし、この地上における苦悩の問題にこそ宗教は応えるのであり、キリスト教では、墮罪、贖い、善の勝利、という二つの神秘によってその問題に答えているとする。ローザノフは、イヴァンの告発はこのうち墮罪と善の勝利を否定するものだと批判し、この問題に関する自説を展開する。子供の苦悩の問題には一種因縁論的な解釈<sup>15</sup>を行い、一般に地上の苦悩については「すべての苦悩の浄化的意義」（p.116）を強調し、「人はすべての苦しみを祝福しなければならぬ、なぜならその苦しみの中で神が人を訪れるのだから」（p.116）と結論する。この部分はローザノフがイヴァンの問いの重さを評価しながらも、それを批判する所であり、ローザノフがドストエフスキーと大きく別れるところである。その意味については後に論じよう。

「大審問官」はローザノフによれば、先の宗教の三つ

の神秘の二番目、つまり、贖いの問題をめぐって展開されることになる。この意味でローザノフはこれを「新約的」部分と呼ぶ。この部分についてローザノフは引用を多用して次のように説明する。キリスト教では人間の墮罪はイエス・キリストの十字架によって償われるとする。しかし、「大審問官伝説」が問題にするのは、はたしてキリストがこの世にもたらしたものが人間の救いなのかという驚くべき問いなのである。大審問官が主張するのは、ひとことで言えば、キリストがもたらしたものの、つまり人間精神の自由としての信仰の提唱は、人間をかえって不幸にした。人間を幸福にするのはかえって荒れ野でイエスを誘惑しようとした悪魔の主張だということである。イエスはパンと奇跡と全世界の支配権を拒否し、それよりも神に従うことを求めた。しかし、それは大審問官によれば、普通の多くの人間には不可能である。普通の人間はパン（物質的幸福）と奇跡、神秘、教権によって定められた信仰（これによって精神の自由による信仰の重荷がなくなる）が望ましいのである。そこで一部の

人々（大審問官も含まれる）はパンを保障し、奇跡、神秘、権威をうまくあやつり創りあげた表面的なキリスト教によって導かれる社会を一五世紀間かかって創り上げた。そこに真のキリストがあらわれた時、多くの人々（民衆）への愛（それは一部の強い人々への愛ではなく、多くの弱いものへの愛とされる）によって「大審問官」はキリストを否定するのである。

ローザノフはこの物語の中で「要求と必要」、「理想と現実」(PIIT) が激しくぶつかり合うのを見た。「ここでは黙示録的な形で、人間における天上的なものになりたいする、全ての地上的なもの、下方に引き寄せるものの反対が提示されている」(PIIPI)。さらにローザノフは人間の歴史を導いているものが荒れ野での悪魔の誘惑とそれにたいするイスエの言葉にあったと指摘する。「荒れ野でイエスを誘惑した『力ある賢い精神（悪魔—引用者）の忠告の中に全世界の歴史の秘密と人間の本质が持つ最も深い要求への答えが含まれていた」(PI49)。

二つの力の対立はまた次のような言い方でも表現され

ている。「大審問官伝説」は宗教的なものへの燃えるような渴望と宗教的なものへの完全な無力が総合された歴史上唯一のものである」(P.171)。ローザノフによれば、人間と人間の歴史を貫き動かしてきたこの二つの力、すなわち、人間を自由へと高める力と自由よりも地上の幸福を求める力の対立は現在も続いており、後者、悪魔にそそのかされた力はいかえって強まっている。「まず神の国を求めよ」というキリストの教えに反して人々はますます地上の幸福を求めている。西欧文明の発展はそのあらわれだとローザノフは考える。しかし、人が神に替わって(人神が)地上の幸福を建設しようとすることはいかえって人の苦悩を増すのである。ローザノフは不気味な予言を語る。

「人が自分の苦悩と闘えば闘うほど、その苦悩は増大し、全体的なものになっていく。そして人々はおもはや個人や数千、数万の単位ではなく、数百万、民族単位で滅びていく、神を忘れ、自分にひざまづ

こつ」(P.132)。

【伝説】の最後の部分は、大審問官の発生とカトリシズムの関係を暗示し、ラテン人のカトリシズム、ゲルマン人のプロテスタンティズムにたいしてスラヴの人の正教の優位を説く、という定型的なスラヴ主義の見解が披瀝されているが、ここではその意味は問わず指摘するにとどめよう。

以上の検討から次の二点が指摘できる。第一に、「伝説」とは魂にたいするドストエフスキーの理解の深まりの過程を述べ、その過程の極点に「大審問官」を位置づけた評論であった。「伝説」についての一般的評価は第一に「大審問官」を最初に意義づけたという点にある。しかし、それは、魂の不可思議さ、その不可思議に潜む神とのかかわり、そのかかわりにおける苦悩の問題への問いかけ、というローザノフがドストエフスキーに見いだした発展の過程に基づいていた。またそれはローザノフの魂への関心がドストエフスキーの魂への関心と共鳴したところに見いだされたものであった。

第二に指摘されるべきことは、ローザノフの理解が本

質的には信仰の側からのものであったことだ。「大審問官」でドストエフスキーは大審問官とキリストを互角に描くことができた。例えば、ベルジャーエフはこう述べている。

「この伝説は謎である。伝説を語っている者が誰の側なのか、また作者自身がどちらの側なのか、必ずしも十分に明らかではない。謎解きの多くが人間の自由にかかされている」<sup>16)</sup>。実際ここにドストエフスキーの作家（思想家）としての力量があった。しかしローザノフのドストエフスキー理解は本質的な点で一面的である。それはすでに見た点からもある程度明らかのように、ローザノフは魂に存在する「神秘的なもの」が神に由来することを確信していた。そして苦悩が神に由来することを確信していた。また先の宗教の第三の神秘、つまり善の勝利を確信していた。この点で『伝説』の第十八章は興味深い。そこでは人間の理性、感情、意志が真理、善、自由をめざすものであることが明確に述べられている。

「真理、善、自由は人間の本質が自らの基本的要

素、つまり理性、感情、意志において実現をめざしている主要な恒常的な理想である。これらの理想と人間の始源的構成には相関関係があり、そのために人間の本質は不可避免的にそれらに向かうのである」(p.167)。

おそらくこのような宗教的確信を持たない『伝説』の読者が最も鼻白むのはこの部分だろう。

従ってドストエフスキーが「アポリア」として提出した問題にローザノフは答えを持っていた。「カラマゾフの兄弟」では自由に敵対する悪の部分のみが描かれたが、以後書かれるはずの部分ではドストエフスキーは信仰の積極的な面を描こうとしていた、というローザノフの評価はここから来ている。

しかし、信仰によるものであるか否かにかかわらず、彼の魂（精神）への深い関心と独自の洞察力がローザノフをドストエフスキーの最大の理解者の一人にしたことは間違いない。ここでドストエフスキー研究の専門家であったA・S・ドリーニンの『伝説』評をファテーエフ

の研究書から引用しておきたい。

「ローザノフは——引用者）極めて才能のある  
社会政治評論家、批評家、思想家、ドストエフスキー  
作品の宗教、哲学的観点からの最良の解釈者の一人  
である。象徴主義の批評家たち、メレジコフスキー、  
レフ・シエストフ、ヴォルインスキー、ヴァスチエ  
スラフ・イヴァーノフ、そして彼らの弟子たちはロー  
ザノフが素晴らしい作品『大審問官伝説』で初めて  
述べたドストエフスキーについての基本的な命題を  
ただ深化させ、拡大しているに過ぎない」<sup>17</sup>。

#### 四、『理解について』から『伝説』へ

われわれは今まで「理解について」と「伝説」を検討してきた。次に前者から後者への移行がローザノフの思想の発展において持った意味を考察したい。

「伝説」でローザノフがドストエフスキーに見いだしたものは、優れた魂の洞察力、魂の神秘的構成の発見、魂の地上における最大の問題——苦悩と幸福の問題の——

——の提起であった。一方、精神（魂）の問題（幸福の問題を含めて）こそローザノフが「理解について」以前にもまた「理解について」でも最大の関心を注いだものがあった。つまり二つの著書は同じ問題意識に貫かれている。「理解について」の著者ローザノフが「伝説」の著者であることに何の不思議もない。しかし、「理解について」と「伝説」は対象、形式における相違を含めていくつかの重要な相違がある。その点を考察してみよう。

（一）「精神」（ドゥーフ）から「魂」（ドゥシャー）へ

「理解について」では「魂」という語はほとんど使われていない。頻出するのは「精神」という語である。それに与えられた意味の重要性はすでに見た通りである。一方「伝説」に頻出するのは「魂」という語である。「魂」（「精神」ではなく）こそは、ローザノフによれば、ドストエフスキーの関心の中心であった。この変化は何を意味するのか。

「理解について」で「精神」は人間世界の中心であっ



た。特に理性には止むことのない「理解」への欲求と世界理解の「図式」が付与されていた。そこでは「精神」に積極性が存する。一方「伝説」での「魂」はもっぱらその深み、神秘性が問題とされ、受動的である。「魂」ではもはや「精神」のなかでの理性の積極的欲求が失われている。というよりその機能はドストエフスキーの天才的な洞察力に与えられ、「魂」自身は底知れぬ深みをたたえた闇となっている。結局、「精神」から「魂」への移行はローザノフにおいて「魂」の不可思議が理性の能力を越えてしまったことを示しているように思われる。すでに見たようにローザノフはドストエフスキーの魂についての見解を「人間とは自己の本質の全一性において非合理的な存在である」に集約した。ローザノフ自身がこの命題に引き寄せられたと言える。例えば、それはすでに引用した次の文章によくあらわれている。「どれほど美の世界が魅力的であろうが、それよりもなお魅力的なものがある——それは人間の魂の墮落である。生の数少ない和声を消してしまふ生の奇妙な不調和である」。

これはドストエフスキーが魅せられたものを語った部分であるが、それを感じ取れる感受性は「理解について」を越えている。また先に見た「伝説」における真理、善、自由への確固とした志向を主張する鼻白む部分とも対立する。つまり「伝説」には「理解について」の残滓とそれを越える新しいものが混在している。そしてさらに言えば、ここにはローザノフが後に、魂あるいは人間の生の不可思議を表現するのに多用する、矛盾に満ちた表現の芽生えがある。いずれにせよ「理性」の持つ力（特に世界理解の力）への信頼がローザノフの中で失われていった（あるいは、「理性」を超えるものへの志向が強まっていた）のである。「精神」から「魂」への移行はそれを物語っているように思う。

#### (二) 哲学から評論へ

「精神」から「魂」への移行は形式的には哲学から評論への記述形式の移行であった。「伝説」の成功、先輩でもあり恩人でもあったストラトラーホフの助言は、<sup>18)</sup>「伝説」以後それを決定的なものにした。しかし、もうひとつの

契機がローザノフにはすでに存在していた。すでに大学時代にあった歴史への関心が『理解について』以後強まっていたことである。一八八八年に口頭で発表され、一八九一年に「ロシア報知」に掲載された論文「歴史におけるキリスト教の位置」はその事実をよく示している。内容には触れず、そこでの歴史理解を示せば以下のような。現代人は目的の観念を失った。しかし人はそれなくして生きられない。人はそれを歴史の内に見いだす。

なぜなら歴史とは人間の感情や希望の総体であり、それらの考察によって、源泉を明らかにすることはできないにせよ（『理解について』はこれを目指したものであった）、歴史を貫くプランが理解できる。そして歴史のプランを知ることですべて意識生活の目的が明らかになる。

「人は世界という建物の内で失ったものを自分の歴史の内に見いだす<sup>19)</sup>」。歴史への傾斜は明らかに「理性」の地位低下を意味した。また「理解について」の観念性、抽象性から具体性への道を開くことになった。さらにこの具体的なもの、一回的なものの独自性を見事に表現する

ことにローザノフは優れた力量を發揮することになる。またこの具体性と抽象性との結合こそ後の「ローザノフ的」文体を創りあげることにもなるのである。

ところでローザノフはなぜ「歴史」ではなく「評論」を選んだのか。地道な実証的性格を持つ本格的な歴史学は明らかにローザノフには適していなかった。評論はローザノフの抽象性、観念性、思弁性への嗜好と彼の具体的なもの、一回的なものへの深い関心を同時に満たすものであった。ちなみにこの点もローザノフがドストエフスキーに見いだした希にしか見られない優れた能力であった。「ドストエフスキーにおける一般化への極めて優れた能力は個別的、個人的なものへの繊細な感受性と驚くべき形で結びついていた」(p.88)。

### (三) 二度目の結婚

ローザノフにおける「精神」から「魂」への移行で重要な出来事をもうひとつ挙げておきたい。すでに述べたように「理解について」が完成後、ローザノフはアポリナリア・スースロヴァと別れる。「理解について」が世

間に全く無視されるといふ事態が次に続く。ギムナジウムでの教師生活はおもしろくない。ローザノフが二度目の妻となるヴァルヴァーラとのつきあいを深めるのはこの頃である。しかし、アポリナリアが離婚に応じないため、結局二人は秘密結婚をすることになった。「伝説」

が書かれた年であった。ヴァルヴァーラとの出会い、そして結婚はローザノフにとって人生上のみならず、思想上の大事件であった。この点については他の論文で触れたのでそれを参照して頂きたい。<sup>(20)</sup>

ローザノフがヴァルヴァーラとの出会いから得た最大のもの、ヴァルヴァーラと彼女の母親をはじめとするルドネヴァ家の人々の生き方を知ったことであった。彼らは赤貧の中にあっても、その現状を何の不満もなく受入れ、他人を羨むことがなかった。ローザノフは生まれて初めて「高潔な人々」に出会ったと述べている。自分はまだ生きていく目的を見いだせなかった（「世界は私にとってコスモス（中略）ではなく無秩序であり、絶望したときは単なる穴にすぎなかった」と述べた後で

ローザノフはこの出会いの持つ意味についてこう記している。

「私は驚いた。私の「観念」ではなく「生活」の「新しい哲学」は、大きな驚きから始まったのである。

「先天的総合判断はいかにしたら可能か——この問いかけからカント哲学は始まったが、私の新しい「哲学」は問いかけから始まったのではない。それよりもむしろ、生活はいかに高潔になりうるものか、そしてただそのことよってのみ幸せになりうるのか、「昼食のスズキがない」、「ついでにうちの薪がない」とないない尽くしの人々が、いかに高潔に、幸せに暮らすことができるものか、辛く悲しい、限りなく悲しい思い出と暮らしながら、誰にも背くことなく（羨むことなく）、誰にたいしても罪を犯していないというただひとつことよって幸せでいられるものか、ということを目のあたりにし、驚いたことから始まったのである。「中略」。

「このことから私の新しい生活は始まったのである」<sup>(21)</sup>

〔落葉〕。

後年書かれたこのアフォリズムを私はかつて「ローザノフの神話」と呼んだ。確かにここには神話につきもの高い調子がある。『理解について』の著者が世界を無秩序だと見なしていたはずがない。しかし、ローザノフはあれだけの論証にもかかわらず自分の哲学に確信が持てなかったことも確かであった。彼自身納得のいく「生活の新しい哲学」は彼の「新しい生活」から生まれたのである。

「精神」から「魂」への移行、「哲学」から「評論」への移行、「生活の新しい哲学」の誕生といった一連の出来事は、一八八七年から九一年までの五年ほどの短い期間に生じている。それらの後に批評家ローザノフは誕生したのである。

《注》

(1) Николкин, А., В. В. Розанов — литературный

критик, В. кн.: В. В. Розанов, Мысли о литературе,

Москва, 1989, стр. 11

(2) Там же, стр. 11, 12.

(3) Розанов, В. В., "Автобиография", В. В. Розанов, О себе и жизни своей, Москва, 1990, стр. 690.

(4) Гросман, Л., Пути Достоевского, Ленинград, 1924, стр. 148.

(5) Фатеев, В. А., В. В. Розанов, Жизнь, творчество, личность, Ленинград, 1991, стр. 67.

(6) Там же, стр. 37.

(7) トルストイの問題提起に誠実に答えた西欧の学者の一人がマックス・ヴェーバーであった。ヴェーバーは晩年の『職業としての学問』（一九一九年）でトルストイに答えて次のように述べている。「もしここにかのトルストイがふたたびあらわれて、学問がそれをなしえない以上は、例の『われわれはいつたいなにをなすべきか、またいかにわれわれは生きるべきか』という問い——あるいは今夜ここで使われたことばで言うならば、『あい争って』

る神々のいずれにわれわれは仕えるべきか、またもしそれがこれらの神とはまったく違ったものであるとすれば、いったいそれはなにものであるか」という問い——に答えるものはだれかとたずねたならば、そのとき諸君は答えるべきである。それはただ予言者か救世主だけである、と」(マックス・ウェーバー著、『職業としての学問』、

尾高邦雄訳、岩波文庫、一九八〇年、六六ページ)。

(8) 理性の「図式」にない「存在」がやっとここにあらわれるのはローザノフ哲学が後に本文で検討されるようにフォルマ中心の哲学であり、「存在」は「本質」、「属性」を支える基盤としか考えられていないからである。

(9) 『文学の流刑者たち』(一九一三年)には『理解について』の成立についての興味深い話が注として載せられている。それによればローザノフは『理解について』を書き始める以前に、ある時(パイプにタバコを詰めていた時だと言う)、神によって予定され、使命を与えられている世界と物の世界(人間の世界)が深淵をはさんで存在することを悟った。それは「聖なる時」であった。「(五七歳

になる)今までの私の世界観は本質的にこゝ(二つの世界が存在することを悟った「聖なる時」——引用者)から出ている。私は *destinations* (使命、予定——引用者)に全く身を委ねた。「神が望むように」、「われわれから育つように」、「われわれの中に置かれたように」(「種」の観念は「理解について」全体の指導的原理だ)。一方、*metae* (物——引用者)、「駆け去るもの」、「偶然的なもの」、「放蕩息子である人間が自分に考えだす」もの、人間が「気まぐれに創り」「壊れていく」もの、を個人的には敵意をもって眺めた」。

Rozanov, V. V. *Literaturnye iznaniiki*, СПб., 1913, T. 1, стр. 342, 343.

(10) 前掲書。Автобиография, стр. 691.

(11) 『理解について』では感情の一形態である気分が高く評価されている。ローザノフは後に気分を重視するようになるが、それはひとつには本文で検討されるように理性への信頼が失われていった結果である。しかし『理解について』ですでに気分が高い評価が与えられているのは

注目に値する。「歴史において偉大なものは全て気分によって創りだされた。宗教と革命、芸術と文学、生活と哲学は、同じように、それらを創りだした人々の気分から特別な性格を受け取っている」(p.329)

- (12) ローザノフの宗教観は宗教学者岸本英夫の「信仰体制の形態」の分類では「融合態」に属する。高木きよ子の解説によれば、それは以下のものである。「人間の解決の問題が、日常の問題をはなれて、深い境地で把握するようになる形態のものがある。自分と、宗教的対象を一致させ融合させることによって、そこに限りないよろこびをえる。宇宙の本体ともいべきものに、個である自分をまったく投入させ、究極的なやすらぎを見出す。この形態では、自我、自意識をすてさせることによって、問題の解決をはかり、そこに、究極的な意義を見出す。今までにない特殊な体験領域が展開するのである。これを融合態とよぶ」。高木きよ子、「総説」、「世界の宗教」(岸本英夫編)、大明堂、平成四年、七ページ。

- (13) しかし、ローザノフが実際にパスカルの『パンセ』を説

んだのは、一八八九年になってからのことであった。それはエレット・ギムナジウムの同僚P・D・ベルヴォーフが翻訳したものである。また「パスカル論」の未完の原稿が残っている。前掲のニコリューキンの解説参照のこと。

*Мысли о литературе*, стр. 21.

- (14) ドストエフスキの文明にたいする見解としてローザノフがここで述べているもの(ローザノフもそれを共有していたと思われる)は実はコンスタンチン・レオンチェフの文明観によく似ている。ローザノフはこの『伝説』の発表をきっかけに死の直前に一年にも満たない期間ではあったがレオンチェフと文通することになった。ローザノフはレオンチェフの著書をすでに読んでいたらしい(二)の点については前掲書 *Фарев, Жизнь*, стр. 48 参照のこと)。二人は意気投合したが、それにはこのような見解の一致があったからだ。しかし、ドストエフスキに関する評価では二人は意見を異にした。レオンチェフはドストエフスキのキリスト教観を「バラ色のキリス

ト教」と批判した。この点については拙論「K・レオン  
 チェフ研究小史」(『ロシア史研究』第五七号、一九九五  
 年)を参照のこと。

(15) ローザノフによれば、生殖という行為の中で親は子供に  
 肉体のみならず魂も与える。その際、親は自分の魂の歪  
 み、罪もつたえる。「こうして子供には欠点がない、従っ  
 て彼らには罪がないというのはただ見かけだけのことで  
 ある。彼らの中にはすでに彼らの父親の欠点、罪が隠さ  
 れている。(中略)。報いを受けていない古い罪が彼ら  
 の中にすでにある。この報いを彼らは自分の苦しみで受  
 けるのだ」。大きな罪を犯した者は自分の罪を自分の死だ  
 けでは償えない。「彼はこの犯罪に自分の存在だけで責  
 任がとれるだろうか。否、犯罪は隠されたまま、罰され  
 ることなく残る。そして数世代が過ぎ、見た目では理解  
 できない、正義の法が犯されているように見える苦悩  
 としてあらわれる。実際にはその苦悩は正義を補ってい  
 るのである。」(P.115, 116)。

(16) Бердяев, П. Н. Бердяев, *Философия, творчество,*

*культуры и искусства*, т. 2, Москва, 1994, стр. 124.

(17) 前掲書、Фатеев, *Жизнь*, стр. 59, 60.

(18) ニコライ・ニコラエヴィチ・ストラホフ(一八二八—  
 九六年、批評家、哲学者)はローザノフの良き理解者で  
 あった。ストラホフはローザノフの作品の抽象性を批  
 判し(「あなたの抽象への情熱は、私の意見では、多くの  
 ものをだめにしていきます」)、また一方では、生き生きと  
 した評論を褒め称えた。「あなたの批評論文を貧るよう  
 に読んでいます。なんとという素晴らしいテーマ、なんと  
 という比類のない調子でしょう。立派で善良な魂の人柄が  
 現れています」(ファテーエフの前掲の研究書、Фатеев,  
*Жизнь*, стр. 47.)

(19) Розанов, В. В. *Религия, философия, культура,*  
 Москва, 1992, стр. 31

(20) 拙論「V・V・ローザノフの人物批評について」、『鹿児  
 島女子大学研究紀要』、第十五巻第二号、平成六年。

(21) Розанов, В. В. *Избранное*, А. Neimanis, 1970, стр.  
 143, 144.

(22) 前掲の拙論、「ローザノフの人物批評について」、二二七ページ。